

米が北朝鮮空爆？総選挙後の政権課題 タイミングは今しかない 安倍首相が仕掛けた解散・総選挙

政治ジャーナリスト 鈴木哲夫

国連で放った対話の全面否定

「まずは内閣支持率が回復して来たことです。森友学園、加計学園の問題などで、安倍首相が不誠実だと支持率がこれまでにないほど下がった。ところが、その後特に北朝鮮への対応で支持が戻って来た。2つ目は野党の現状。民進党がボロボロ。小池新党もまだ準備がままならない。今やれば必ず勝てる」――。

安倍首相の側近の1人は「なぜ今か」についてそう話した後、背景にある北朝鮮問題の深刻さをつけ加えた。

「実は、年末にも北朝鮮と米国の関係は軍事衝突となる可能性が出て来ている。日米の外交筋では、トップ同士の間でこうした情報が共有されているんじゃないか。その観点からも、今のうちにやらなければ、解散時期は限りなく任期満了にまで追い込まれ支持率だつてどうなっているかわからない。ならば今しかない、ということではなかったか」

解散総選挙の後には、安倍政権にとつておそらく第二次政権発足後、最大級の政治課題が一気に降りかかって来る。その筆頭には、北朝鮮有事をきっかけにしての日本の安全保障・外交の姿だ。日本が、北朝鮮にどう対応し、何を備え、世界にどう発信するかは、国民的な議論が必要だ。

気になるのは、安倍首相が総選挙前の9月21日(日本時間、ニューヨークの国連総会で一般討論演説を行なったその内容だ。

北朝鮮問題を取り上げたのはもちろんだが、その内容は特徴的だった。北朝鮮を厳しく批判した上で、「必要なのは対話ではない。圧力だ」と「対話」を全面的に否定したことが、

「対話とは、北朝鮮にとつて、我々を欺き、時間を稼ぐためむしろ最良の手段だった」

「北朝鮮に総ての核・弾道ミサイル計画を、完全な検証可能な不可逆的な方法で放棄させなければならぬ。そのために必要なのは対話ではなく、圧力だ」

「対話による問題解決の試みは無に帰した」

実は、安倍首相の演説より前、トランプ米大統領が初めての国連総会演説を行なったのだが、その内容は同じように北朝鮮を容赦なく批判したものだ。

「今日の我々の地球に対する罰は、小さなならず者の独裁国家グループによつて引き起こされている」として、北朝鮮の最高指導者である金正恩氏を、まるで映画の主人公でもあるかのように「ロケットマン」と稚拙に揶揄し、「ロケットマンは自殺行為に突き進んでいる」と言い放った。

この他、トランプ大統領はイラン、ベネズエラなども次々に批判したのだが、国連という場で、存在感を示してきた米大統領の演説としてどうなのかという批判が、世界中で上がった。

「トランプの無知なペイトゥスピーチ」(出席者)、「支離滅裂で威圧的な空気」(英紙)など。

そもそも、総会冒頭でグテレス国連事務総長は、「怒りがこもった対話



国連総会の一般討論演説に臨んだ安倍首相は北への「圧力」を強調（首相官邸）

は、取り返しがつかない誤解につながる」と演説し、トランプ大統領の演説内容を危惧していた。

日本の存在感にマイナス点？

ところが、安倍首相の演説もトランプ演説に歩調を合わせ、「対話ではなく圧力」と言い切ったのだった。外務省OBはこう感想を話す。

「国連というのは何なのか。場合に

よつては制裁決議などもあります。外交的な対話が基本です。そうやって解決策を見出しているところの国連なのに……。トランプ大統領がああいった演説をすることはある程度予想できましたが、日本まで『対話に意味がない』などと追従したのは驚きました。一体この問題にどう対処するのか。考えなければならぬのは出口です。それは対話と朝鮮

半島の非核化でしょう。安倍首相の演説には、せめて対話という日本ならではのメッセージを入れるべきでしたし、場合によっては拉致問題という全く別の視点での発信とアプローチをしてもよかつたのではないかと。国連での日本の存在感は、マイナス点がついたのではないかと。それにしても、日米で演説内容を擦り合わせたのは間違いないでしょう」

しかし、今回そこまでトランプ大統領と安倍首相が密接に連携したとすれば、冒頭の側近議員が推測するように、『北朝鮮への軍事行動情報共有』も充分あり得ることになる。「本当に愚かな戦争になって行くのか。再三繰り返しますが、出口は何か。そこへ向けて日本は米国にもモノ申し、関係各国の接着力になるなど独自の対話外交を進めるべきだと思います」（前出OB）

3連休を使い公明党説得工作

安倍首相が、かつて私のインタビューに「政治信念ですから」と答えたのが憲法改正。長期政権維持を第一に掲げ、無理に改憲で突破しないのではないかとといった見方をする自民党幹部もいるが、「首相は絶対やる」

と安倍首相に近い自民党幹部は断言する。しかし、発議には衆参それぞれ3分の2の勢力が必要。

「3分の2をカウントするとき、今は自民党と公明党、日本維新の会を改憲勢力として数えますが、公明党は特に9条など慎重です。3分の2で発議して国民投票まで持つて行けるかは、これからの勝負です」（前出幹部）

実際、今回の解散総選挙の影で、安倍首相と公明党の間で、憲法改正がらみでの駆け引きがあったという話もある。

そもそも、解散総選挙の話が永田町で表に出始めたきっかけは、公明党の最大の支持団体である創価学会



安倍氏の政略にも影響を及ぼす？金正恩氏



安倍氏と会談を行なった山口氏（公明党）

開票という話になるんだろうということが分かりましたね」

安倍首相が、臨時国会冒頭の解散を決断するまでに、まず、9月10日に東京・富ヶ谷の安倍首相の私邸で、早期解散を勧める麻生太郎副総理兼財務相が訪ねて来て会談。そして翌11日には、首相官邸には連立を組む公明党の山口那津男代表、自民党の二階俊博幹事長が相次いで訪れ会談。

の動きだった。9月16、17、18日。敬老の日を含むせつかくの3連休も、台風18号が日本列島を縦断するという最悪の天候となった。

もともと創価学会は、その3連休を使って、会員らが全国各地でそれぞれ対話の会合を開く予定になっていたが、台風のために総て中止としていた。

ところが、17日。そんな状況の中にあつて、急遽全国各地の支部の選挙対策の責任者に召集がかかったのだ。

公明党国会議員秘書が言う。

「驚きました。台風で交通手段だってままならない中で敢えて集まるとはよほどのことだ。いつと決め打ちはしないけど、遅くともこの臨時国会中に解散になる、最短で10・22投

実は、安倍首相が山口代表と会う場面というのは「よほどの重要局面」だと公明党参議院議員が言う。「2人は政策理念や政治姿勢などケミストリーが合う方ではない。日常的に会っていろいろ話し合うような関係ではない」（同）また、安倍首相と山口代表の会談は18日にも行なわれた他、官邸との間を行き来した二階氏も公明党や学会には太いパイプがある人物。こうしたことから、安倍首相の今回の解散のタイミングの背景には、公明党の意見や姿勢も関わっているのではない。

「学会は最大決戦だったこの夏の都議選を終えて、今後来年に向けては学会の重要イベントや活動などから、やるなら今、というのが本音だと学会の地域の幹部から聞かれています。一方、山口代表。公明党は憲法改正勢力とされているが、9条改正には慎重。法律家である山口代表は特にそう。自民党はこの秋に草案をまとめる方向でしたが、山口代表はこのところ『常在戦場』と早期解散を支持して来た。今選挙をやれば、改憲論議を棚上げできるという思いがあつたはず。こうしたことから、会談で山口代表はこうした空気を出し、安倍首相の背中を押したと思います」

この自民党議員が言うように、改憲日程を少しでも遅らせたいのが本音とすれば、今後自民党が草案をまとめたところで、来年の通常国会で発議まで行き着くかは不透明だ。

安倍首相周辺は、「小池新党の面々は憲法改正に賛成と見ていいが、一連の山口代表の発言などを聞いていると、公明党は慎重にやってくるだろう。改憲勢力の根回しや再構築が必要になって来る」と話している。

加速する自民党総裁選レース

そして、安倍首相にとって大きなヤマ場は、9月予定の自民党総裁選だ。3選を目指す安倍首相に対して、戦闘モードに入っているのが石破茂元地方創生相だ。

前々回の内閣改造から入閣を断り、地方創生など政権構想をまとめる一方、全国を行脚して対話をつづけるなど、次期総裁選で安倍首相と真っ向から論戦する準備を進めている。

今回の早期解散についても、安倍首相に対して厳しい言葉を放つて来た。

「国民に何のための解散か、何を問うのか、明確にする必要がある。（多くの国民が）『この解散の意義は何なのか』と思っている」（自身の派閥総会）

「自民党に対する信頼が確固たるものになっているとは思わない。7月の東京都議選、今まで自民党の最低だった議席は38だったが、今年、都議会で頂いた議席は23議席で史上最低だった。都議会で起つたことは、必ず次の国会の選挙で起る。そういうものだ。自民党は最近驕っているのではない、いい気になっているのではない、国民をなめているのではない



戦闘モードに突入した石破氏（自民党）

か、そのような自民党であつてはならない。国民をなめて選挙をすれば必ず厳しい審判を受ける。もう一度、正直で、実直で、誠実で、真面目なそういう自民党に変えていかねばならない（愛知県豊田市の街頭演説で）

「核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず」という非核三原則のうち、『持ち込ませず』について議論が必要ではないか。冷戦期の中国の核実験当時から議論は進んでいない。米国が核の傘を差してくれなかったらどうなるのか。ここは逃げずに議論するべき」（マスコミ各社のインタビューで）

「（9条2項を削除した2012年の党改憲草案について）今でも党議決定は草案のまま残っている。その説明も全くしないで、（安倍首相が提起した）9条の1項、2項そのまま3項をつけ加えるという議論は、どう考えても党内民主主義としておかしい」（自身の派閥総会で）

石破氏の地方での人気は高い。自民党での選挙応援要請は、小泉進次郎氏と並んでトップクラスだ。今回の総選挙でも、全国の選挙区を回り、街頭で、「自民党の謙虚さ」を訴えている。

九州地区の自民党県連事務局長は言う。

「今回の解散は唐突で、我々の中でも今やるのはどうかといった声の方が多かった。石破さんは、そうした黨員の本音を分かった演説をする。今回の選挙は安倍さんが仕掛けたが、皮肉にも石破さんにとつて全国応援で存在感を示すいい機会を与えてしまったんじゃないか」

ポスト安倍には、岸田文雄政調会長や野田聖子総務相、ここへ来て外交スタイルで注目を集める河野太郎外相などの名前も挙がるが、「岸田氏は安倍首相を支持しながら禅譲



総選挙に打って出た自民党。果たして吉か凶か

狙いか。野田総務相は週刊誌にスキヤンダルが出て一歩後退。河野外相は支持が広がるのか」（自民党ベテラン議員）といった状態。

安倍vs石破の総裁選レースは本格化するようになる。

対野党で見れば、野党は森友学園や加計学園問題で、当時の録音テー

プや資料などを新たに入手して、国会での追及を準備している。

「夏には国民が最も反応し支持率を大きく下げたテーマ」（民進党幹部）

でもあり、安倍首相の説明責任問題が再び週上に上がる可能性がある。

国会は、総選挙を終えた次のステージへ移る。